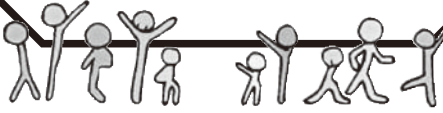


## 「聖なる音」に耳を澄ませてみよう： 宗教心とは関係なく

国際コミュニケーション学部  
加納 寛



幼いころからお経の大好きな、どこにでもいるナウでイカした少年だった。我が家にお経を唱えに来てくれていたのは音楽の教員をされていたお坊さんで、声楽が専門だったので、その方が唱えるお経はオペラや歌謡曲のように聞こえたものである。友人が歌手とかアイドルとかに憧れる一方で、お経大好き少年はお坊さんになることを夢見たものであった。あだ名も当然のことながら「観音さん」（苗字にも関係していたと思うけど）。写真のポーズは常に仏像ポーズ。好きなテレビ番組は『一休さん』。愛読書は、お寺さんから我が家に毎月送られてくる仏教小冊子。ただ、お坊さんへの憧れは、宗教心では全くなく、音楽的なものへの一途な憧れだったので、めぐり合わせによっては、ゴスペルができる牧師さんとか、アザーン（イスラームにおける礼拝の呼びかけ）を唱えるムアッジン（モスクでアザーンを唱える人。功德があるので、審判の日に首が長くなるらしい。なんじゃそら）とか、オペラ歌手とか、デスメタ歌手などに憧れるようになった可能性はある（実際、我が家の長男は、音遊びが大好き

であったが、お坊さんには全く興味を抱かず、藝大で声楽を学んでいる）。お坊さん一直線なイケてる少年が、お寺の子でない子供がお坊さんになる道は非常に狭いという残酷な現実を知ったのは、小学校中学年の頃であったと思う。今から考えると一つの挫折だったかも。

こんな感じで育ちまったので、今でも、お経を聞いたりお経もどきを唱えたりするのは大好きである。夜中に鼻歌交じりにお経もどきを唱えていて（宗教心からお経を唱えているわけではないので、鼻歌交じりのような気安さで接している）、妻にド叱られる毎日であるが、妻が寝静まってから枕もとで唱えたりもできるので無問題である。

そんな私が、是非オススメしたいのは、お経でも聖歌でもアザーンでもよいので、「聖なる音」として奏でられる音に耳を澄ませてみることである。私の場合は、実は前述のとおり宗教心から音を尊んでいるわけではないのであるが、通常の場合、「聖なる音」を奏でる側は真



写真1：タイのお寺は居心地がいいです  
（本文に書いたお寺ではありません）

剣である。何しろ聖なるものに捧げたり、聖なる心と呼び覚ましたりするための音だったりするわけで、真心がこめられたその音が美しくないわけではなく、人間の心に響かないわけではないのである。

私の人生のなかで最も美しい音の情景の一つとして記憶に残っているのは、タイで毎日ストレスフルな調査をしていた頃、一仕事を終えて涼しくなった夕焼けの下、お寺の境内の水辺に腰を下ろして聞いた、夕刻のお経である。タイのお坊さんたちが集団で唱えるお経は、それはそれは迫力がある。タイのお経は、タイ語ではなくインド古代の言語であるパーリ語で唱えられるので、タイ語とは異なるリズムを感じることができる。この合唱を、仕事のストレスから解放された状態で、美しい夕焼けの下、涼しい水辺で、心の繋がりを感じる大切な人と一緒に、リラックスして聞くという状況は、「幸せ」の極致であった。このときの情景、死ぬ時にも走馬灯のように頭に浮かぶんだろうなあ。

なお、「聖なる音」は、別にタイのお経に限定されるものではない（私の個人的経験のなかでの「ベスト」がそれだけ）。タイに住んでいた頃は、仏教のお寺とイスラームのモスクが近所にある環境だったので、朝に響いていたアザーンの声も忘れることができない（とくに寢床のなか、ウトウトしながら聞く夜明けのアザーンは、不謹慎かもしれないが格別である）。パリの夏の夜、いくつかの教会をまわって聞いた聖歌やパイプオルガンの迫力も、至福のひとつときを与えてくれた。

しかし、「聖なる音」に耳を澄ませる利点は、幸せなときだけに限らないだろう。むしろ、そ



写真2：国立大学でも托鉢行事が行われたりします

の逆の状態のときにこそ、大切かもしれない。たぶん、辛いことがあった時とか（失恋したとか失業したとか）でも、夕焼けの下でタイのお坊さんたちのお経を聞いたら、心が慰められてリラックスできる気がする。幸せなときや楽しいときはもちろん、苦しいときも、哀しいときも、辛いときも、「聖なる音」に耳を澄ませることのように、自分の心を慰めてくれるであろうことを知っておくことは、生きる上で力になると思う（それは、温泉に入るとか、落語を聞くとか、美味しいお饅頭を食べるとかでもよいだろう。事前に自分に合いそうなものを探しておくとうい）。是非、お気に入りの「聖なる音」を見つけ（そこに宗教性を意識する必要はとくにないと思う）、それに耳を澄ませただけだと、精神衛生上もよいのではないかと思います。オススメ！